

氏名(本籍)	張 ^{ちよー} 惠 ^{けー} 芳 ^{ほー} (中国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第5595号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	モダリティ形式の会話における表現機能の研究 - 「確認用法」の表現形式を中心に -
主査	筑波大学教授 博士(言語学) 沼田善子
副査	筑波大学教授 DL(言語学) 青木三郎
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 砂川有里子
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 杉本武
副査	筑波大学准教授 佐々木勲人

論文の内容の要旨

「明日行くよね」などの「ヨネ」は、話し手が自分の判断について相手の確認を求める「確認用法」を持つ表現形式とされる。本論文は、これに類する諸形式の中、「ヨネ」「ノデハナイカ」「ダロウ」「デハナイカ」を取り上げ、次の三点を主たる目的として考察を行う。

- (1) 実際の会話データを用いて、各表現形式の会話における表現機能を明らかにする。
- (2) その表現機能と形式の意味・用法特性との関連を探る。
- (3) 日本語の研究成果を日中対照研究に活かし、モダリティに関する新たな研究手法を試みる。

これにより、従来にない新しい分析手法を導入して(上記(1)(2))、これら四形式の「確認」とはいかなるものか、その内実を明らかにすると同時に、本研究で示される方法論が日中両語の対照研究にも新たな可能性をもたらすことを示そうとする(上記(3))ものである。

本論文の構成は以下の通りである。

- 第1章 本論文の研究背景と位置付け
- 第2章 研究方法
- 第3章 「ヨネ」の意味類型と表現機能
- 第4章 「確認用法」の「ノデハナイカ」の使用実態
- 第5章 「ダロウ」と「デハナイカ」の表現機能の違い
- 第6章 「デハナイカ」の表現機能
- 第7章 議論や話題展開のプレとしての「～じゃん」(「～じゃない」)
- 第8章 「デハナイカ」と“不是…吗”の表現機能の違い
- 第9章 まとめと今後の課題

第1章、第2章は本論文における研究の枠組みを示すものである。第1章では研究の背景と現在の研究課

題、これに対する本論文の位置付け、第2章では研究方法が述べられる。研究方法では、特に分析手法の独自性が、①自然会話データの使用、②話し手と聞き手のインターアクションの観察、③イントネーションと「意味」の関係の分析、④会話における各形式の「表現機能」と先行研究で明らかにされた意味、用法との関係の記述の四点にまとめられ、その内容と研究上の意義が述べられる。

第3章～第7章は各形式の考察であり、第3章は使用頻度の最も高い「ヨネ」を取り上げる。ここでは、会話データを観察し、会話の流れ・話し手と聞き手のインターアクションから情報の性質を定め、それに基づいて、「ヨネ」の意味類型を捉え直す。その上で、データにおける意味類型の分布から、「ヨネ」の会話における表現機能は「共感を示したり共感を求めたりする」ことだと結論付ける。

第4章は使用頻度の最も低い「ノデハナイカ」を取り上げる。ここでは、「確認用法」の「ノデハナイカ」が、他の表現形式に比べ、会話でほとんど使われていない事実が指摘され、単一の文から分析される表現形式の意味と、語用論的な制約がかかる自然会話での形式の使用とは区別されるべきであることを述べた上で、「ノデハナイカ」の使用における「語用論的制約」を明らかにする。

第5章では、「認識喚起用法」で用法上互換性を持つ「ダロウ」と「デハナイカ」を取り上げ、50～60代女性データを基に、両者の会話における表現機能の違いを考察する。そして、話し手と聞き手のインターアクションに注目し、イントネーションも合わせた分析により、「ダロウ」が必須かつ特定のイントネーションで聞き手に問いかけ、聞き手に情報的確さについて確認するという機能を持っている一方、「デハナイカ」は下降調が多く、話題の提示と展開に役立ち、そのイントネーションを上昇調に変えることによって、話し手は聞き手とインターアクションを取りながら話を進めていくという姿勢を示す、という結論を導く。加えて、この分析結果が両形式の意味特性と関連があることを示す。

第6章は、第5章の考察を受け、「デハナイカ」についてより詳細な考察が加えられる。ここでは、考察対象として20代女性データを加えることで見られる「デハナイカ」の会話過程における表現機能を、発話順番交替規則を基準に、新たに(A)「話題の提示・展開機能」、(B)「確認要求機能」、(C)「評価・感想の表示機能」の三種類に分けた上で、世代別会話データの比較を行う。その結果、50～60代女性、20代女性共に、機能Aの比率が高く、この形式の主要機能であることが示される。同時に、20代女性が多用する「デハナイカ」の変異形「じゃん」における機能(C)の割合の高さに注目し、一つの話題の持続時間をも考え合わせ、この世代の会話の特徴に言及する。

第7章では、前2章の考察を踏まえ、「話題の提示・展開機能」を主要機能とする「デハナイカ」について、会話分析の手法を用い考察を進める。具体的には、議論や話題展開のプレ（「前置き」）としての「～じゃん」（「～じゃない」）を取り上げ、この形式がその機能を「確認」から「提示」へと移行し、議論や話題展開のプレとして相互行為の組織に組み立てられることが、「～じゃん」（「～じゃない」）の後に話者交替が起こらない仕組みとなると考え、同時にこれは「デハナイカ」の「話題の提示・展開機能」に通じるものであると指摘する。さらに、雑談において、なぜ、「話題の提示・展開機能」の「デハナイカ」が頻繁に使用されているのかについて、ポライトネス理論を用いて説明する。

第8章では、自然会話データにおける「デハナイカ」と“不是…吗”の表現機能の違いが、前章までの「デハナイカ」の分析方法を中国語の分析に導入する形で考察される。具体的には、雑談会話データに現れる「デハナイカ」は、使用頻度が“不是…吗”の約4倍であり、機能(A)が大半を占めているのに対し、“不是…吗”には、機能(C)の例が見られず、機能(B)が主であることが示され、この違いの一因として、日中両語の会話における話題提示や展開の仕方の違いが考えられることが述べられる。またこれを受けて、日本語教育や中国語教育で「デハナイカ」と“不是…吗”の会話における表現機能およびその違いを教授することの重要性が指摘される。

第9章では、これまでの考察をまとめ、本論文の結論と今後の課題が述べられる。

審査の結果の要旨

本論文が扱う文末形式の研究は、従来、多くの場合、文のレベルでの当該の形式と他の形式の互換性に注目し、各形式の意味、用法が分析、記述されてきた。しかし、本論文では、それら先行研究の成果が、必ずしも実際の会話の用例に当てはまらない事実が指摘される。これは、中国語を母語とする本論文の筆者が日本語学習の経験の中で得た直感に端を発するものであろうが、本論文では、考察の言語単位を会話のレベルまで引き上げ、実際の会話データを精査することで、この事実が実証的に示される。実際には種々の制約から収集が難しいこの種の言語データを独自に収集し、既存のデータと合わせて丹念に観察する点で、本論文は高く評価できる。また、自然会話の中での諸形式の「表現機能」という概念を設定、分析し、これと、先行研究における各形式の「意味」「用法」を関連づけようとする面でも、「デハナイカ」をめぐる第4章から第7章の詳細な記述など、本論文に見いだせる成果は少なくない。その点で本論文は、従来の研究成果を踏まえ、諸形式の言語運用上の特徴をより包括的かつ十全に描き出す新たな研究方法を開発する上でも、大きな可能性を示すものと言える。さらに、本論文の分析手法を日本語と中国語との対照に導入することで、日中両語のモダリティに関する対照研究に新たな分析の観点をもたらし、この方面の今後の研究への貢献も小さくない。

一方で、本論文で示される重要な概念である「会話における表現機能」と従来の「用法」との区別には再考の余地があり、前者も組み込んだ形で用法を捉え直す可能性も考えられる。その点で本論文での言語形式と意味、用法、会話における表現機能の関係は、さらに考察、整理される必要がある。またこの作業を通し、本論文の研究はより妥当性の高い、洗練されたものへ深化すると考える。加えて、本論文での考察の中の具体的な分析には、例えば「デハナイカ」における発話順番交代規則のデータへの適用方法等、そこで提示される分析指標の在り方も含めて、なお慎重に再考すべき余地を残している。中国語との対照においても、対照する言語形式の選定の問題をはじめ、今後考察の範囲を広げ、さらなる検討が望まれる点は少なくない。

しかしながら、こうした課題を残しつつも、本論文が日本語だけでなく、中国語、あるいは日本語と中国語の対照まで含めた範囲でのモダリティ研究に、新たな視点を加え、進展の可能性を開くものとして、高く評価される点はいささかも揺るがない。本論文の今後の発展が大いに期待される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。